

外部評価実施報告書（まとめ）

項目別評価	評価					
	委員 1	委員 2	委員 3	委員 4	委員 5	委員 6
I 教育の取組と成果	IV	IV	III	III	III	IV
II 研究の取組と成果	III	III	III	II	II	III
III 地域・社会貢献の取組と成果	III	III	II	III	IV	IV

評価

- IV 学部・研究科の目的に照らして、取組と成果が非常に優れている。
- III 学部・研究科の目的に照らして、取組と成果が優れている。
- II 学部・研究科の目的に照らして、取組と成果が相応である。
- I 学部・研究科の目的に照らして、取組と成果が不十分である。

【優れている点】

- ・「国際」「地域」をキーワードに教育・研究・地域貢献を展開している。自己点検書の「図1 履修プログラムの概要」は非常に分かりやすく、貴学部の教育の方向性を端的に表しており、教育の見える化への真摯な取り組みがうかがえる。学部留学生や大学院留学生を着実に確保し、学部内の国際化を進めている点は大いに評価できる。全学的な YU-COE や YAAS を設置し、研究力向上を図っている。県内高校に継続的に教育機会を提供し、県内の高校生のレベルアップに貢献している。
- ・教育の取組と成果
教育目標に「広義の農学」領域の多面的な諸課題の理解と、複眼的・総合的な判断力やバランスを掲げ、専門分野に「基幹プログラム」「国際展開プログラム」「地域創生プログラム」を配した教育を転換している点は、極めて優れていると感じた。
- ・研究の取組と成果
教育研究支援組織「山形大学アグリフードシステム先端研究センター（YAAS）」の設置により、地域と連携し研究成果を生み出そうという仕組みづくりと、他学部・企業を含む総合的な研究機会を研究者まかせでなく、大学自らが作り上げている点は、極めて優れている。
- ・学部教育における広義の農学を意識した3つのコースとコースを跨いだ3つのプログラムによるコース横断型の履修プログラムは、教育目的や社会のニーズに対応した優れた編成になっていると感じました。また、学生1人1人にアドバイザーを配置し、きめ細かい指導体制が伺えました。
- ・入試では一定の倍率を維持し学部の充足率100%を満たすだけでなく、私費外国人留学生入試や外国人推薦入試の実施等により留学生を毎年確保している状況は国際化の点で高く評価できると思います。また、就職率100%を維持できている点も評価できると思います。

- ・3領域における幅広い研究が展開され、大学院学生の各種賞の受賞実績が示すように、大学院生の研究の質の高さが伺えました。
- ・YOU-COE 課題における先進課題の推進、新たに設置した YAAS における食の 10 次産業化を目指した取り組みなど、研究活動を推進し、また検証・評価する仕組みが優れています。各種メディアに取り上げられているように、研究活動の成果は研究だけでなく地域貢献としても評価されています。
- ・外国人留学生を積極的に受け入れている姿勢は素晴らしい。特に、学部入試において別枠で私費外国人留学生入試を設けていること、また、修士課程でのダブルディグリープログラムを運営し、今後も相手校を増やす方向で進めていることは高く評価できる。
- ・1 学科 3 コースカリキュラム制に加え、横串として 3 プログラムの履修プログラムを構築し、教育ニーズにきめ細やかに対応しようとしている教育体制の構築は先進的である。
- ・農学部が中心となって部局を超えた全学的な組織（アグリフードシステム先端研究センター）を構築し、研究や地域貢献により積極的に進めていることは評価できる。
- ・高大連携事業ならびに地域・社会連携活動を積極的に進めていること。特に、山形大学農学部地域産学官連携協議会を作って組織的に庄内地域との実質的な産学官連携を行なっていること、各種審議会員を派遣して地方自治体等に積極的に関わっていることが優れている。
- ・学部において外国人留学生を積極的に受け入れている点、および大学院修士課程においてダブルディグリープログラムを導入している点。
- ・学部において通常の 3 プログラムに加えて、それらの横断型のプログラムを設置している点。
- ・アグリフードシステム先端研究センターや農学部地域産学官連携協議会を通して、地域・社会連携を強化している点。
- ・国費外国人留学生、JICA 留学生、さらにドイツやイタリアの大学との修士ダブルディグリープログラムを通じて、全学生の 10%以上の留学生を受け入れている点は、国際的人材の育成や双方向の学生交流促進に向けた取り組みとして評価できる。
- ・山形大学の 6 学部と連携したアグリフードシステム先端研究センターの研究プロジェクトは、持続可能な農業と循環型社会の実現を目指す取り組みとして評価できる。
- ・複数の高大連携事業を実施しており、各教員の地域貢献度も高く評価できる。

【改善を要する点】

- ・1 年次とコース分け後の 2 年次のアドバイザーが変わるときの情報共有が重要である。カウンセラー採用予定とのことで、アドバイザーとカウンセラーとの連携に期待したい。国際展開や地域創生プログラムへの履修者の増加が望まれる。これら 2 コースを履修する学生に何らかのインセンティブ（例えば、海外短期留学や起業の支援）を与えることも一つの方策かもしれない。
- ・研究の取組と成果
コロナ以降の業績の回復が遅れていると自己評価されているが、応用研究部門は影響を受けたと思われるが、基礎研究部門はどうだったのか。外的要因を述べる際には、影響を受けやすい研究部門とそうでない部門を分けて分析する必要があると思われる。研究分野によっては業績数が下がっていないことも考えられる。

・地域・社会貢献の取組と成果

新聞掲載事例だけでなく、技術指導件数や行政等の委員会参加などを、労力をかけず把握できる方法を模索すべきではないか。山形大学農学部が地域・社会貢献を正しく評価できるデータを作るべきだ。

- ・コロナ禍における研究活動等の制約はあったにせよ、査読付き論文数の半減は目を引きました。YOU-COE や YAAS の取り組みを呼び水に、論文数とともに競争的外部資金の増加も期待します。
- ・3コース・3プログラム教育体制での教育を行っているが、学部として目玉と考えている国際展開プログラムや地域創生プログラムを履修する学生数があまり多くないことが少し懸念である。学生ニーズの把握など、学生との協働の中でプログラム教育体制をより良く改善する余地はあるかと思う。
- ・大学院修士課程への入学者数が年を追って減少していることが気に掛かる。定員充足率も決して高くはない。また、修士課程の標準修業年限卒業率もあまり高くなく、大学院の充実化を図る試みが必要と思われる。
- ・専任教員数に対して論文数・研究発表数・科研費獲得件数があまり多くない。活性化を求む。
- ・大学院修士課程への進学者数について、やや物足りなく感じる。今後は、進学者数の増加や充実化に向けた検討が必要と思われる。
- ・論文業績数について、やや物足りなく感じる。どこの大学でも同様のことが言えるが、論文作成に関する教員の意識改革が必要である。
- ・原著論文リストを分野ごとに作成することで、研究内容や国際共著論文数、大学院生の筆頭著者数などが把握しやすくなり、教育・研究の成果を「見える化」しやすくなると考えます。
- ・外部資金の獲得リストを分野ごとに作成することで、より詳細な評価が可能になると考えます。

【委員からの助言、提言等】

- ・当然のことながら課題はあるものの、全般的に工夫され実績を上げていると評価できます。
- ・フィールド演習や3つのプログラムは実践的な学びが売りになっていると思いますが、報告書では具体的な内容を取り上げ、もう少し強調されていると良いと思いました。
- ・研究成果の状況（2-2）においては、各種成果に関わる論文数や教員数（および大学院生数）等の情報が掲載されていると取り組みの成果がより強調されると思いました。
- ・2-2の研究活動が地域貢献に繋がっている事業も数多く見受けられます。地域・社会貢献にカウントしても良いのではないかと思います。
- ・アグリフードシステム先端研究センターは2022年に設置されたばかりで、評価するには時期尚早と思うが、本センターを上手に運営することで、研究や社会貢献の拡大につながることを期待する。
- ・山形大学農学部が行なっている先進的・独創的な試みは、他大学にとって大いに参考になるものである。今後の益々の発展に、大いに期待している。
- ・大型の外部資金を獲得しており、今後も高いレベルの研究成果を発信し続けることを期待します。
- ・総合型選抜Ⅱにおいて、例えば国際展開プログラムや地域創生プログラムに特化した学生を選抜するための入試制度の導入が可能か検討していただきたいです。